



筑波大学
University of Tsukuba



グローバルな社会課題に挑戦する筑波大生のためのガイドブック

Agoo! Ghana!

It means "Hello! Ghana!"

ガーナで「未知」に出会い、未来を共創する「知」を生み出す。

Let's say
"Amee!"



大学の世界展開力強化事業～グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援～
筑波大学「地球社会共生の未来を共創する学際フィールド共修」

ガーナへ行くなら、このインスタをチェック！



@TSUKUBA_GHANA



フランス・クワメ・エンクルマ
ガーナ初代大統領

ご挨拶

このたび、文部科学省「大学の世界展開力強化事業」（2025年度：グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援）において、筑波大学が提案した「地球社会共生の未来を共創する学際フィールド共修」というプログラムがタイプII（アフリカ諸国）に採択されました。対象国はガーナで、ガーナ大学、ケープコースト大学、クワメ・エンクルマ科学技術大学の3大学とともにプログラムを実施します。

さて、日本では少子高齢化が進み、2050年には人口が1億人を割ると予測されています。一方、アフリカ大陸の人口は現在の15億人から25億人に増え、世界人口の4分の1を占めると予測されています。日本はアフリカと地理的には遠い関係にありますが、日本政府が1993年よりアフリカ開発会議（TICAD）を主導するなどして、アフリカとの関係を深めてきました。日本とアフリカが今後も重要なパートナーとして自他共栄を目指すには、お互いを知り、理解し、双方の立場を尊重しながら、未来の社会を共創する姿勢が求められます。

ところで、皆さんはアフリカに対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。私が中高生だった1980年代はエチオピアを中心に東アフリカで大飢饉が発生し、食料を求め歩く多くの人びとの姿がたびたび報じられていました。また、アフリカ救済のため、米国の著名なアーティストが集結しリリースしたチャリティーソング“WE ARE THE WORLD”が大ヒットしていました。そうしたメディアの影響もあり、当時アフリカは「憐れみ」と「救済」の対象というイメージが広がっていたように思います。

アフリカでは今も紛争や内戦、異常気象などで飢餓に苦しむ人びとがいることは事実であり、その現実を見過ごすことはできません。しかし、それがすべてではありません。たとえば、人びとの間ではモバイルマネーが広く普及し、2021年にはアフリカが世界のモバイル決済額の7割を占めたと報告されています。また、宇宙開発が各国で進んでおり、2025年4月にはアフリカ宇宙庁（AFSA）が発足しています。このようにアフリカは未来に向かって著しい成長を遂げていることもまた事実です。

本プログラムでは、未来を担う筑波大学の学群生が地球社会共生の未来を共創する強い志を醸成し、それをガーナの同じ世代の学生と共有し、あるべき未来を構想し、その実現にチャレンジできるよう、日本とガーナにおいて共修する機会を提供します。本プログラムはあらゆる専門分野の学生でも参加できるよう、工夫がなされています。日本とガーナのさまざまな専門分野の学生が本プログラムに参加することで、参加者は多様な価値観と「未知」に出会い、将来的には未来の共生社会をデザインできる「知」を生み出すことが期待されています。未来志向の皆さんの積極的な参加をこころよりお待ちしております。

筑波大学医学医療系 教授
プログラムリーダー
市川 政雄

目次

9 現場で社会課題を考える。

海洋汚染は目に見えない / 「捨てる」が意味すること / 電子ごみの山から世界は変わる
行商で子どもを救う / 現金はもういない / 日本とガーナが交差する

23 ガーナを肌で感じ取る。

野口記念医学研究所 / 野口英世記念館 / ガーナ大学 / クワメ・エンクルマ記念公園・霊廟
国立博物館 / エルミナ城 / カクム国立公園

33 ガーナでいろいろ

グラスカッターが脱走 / ダンス・ダンス・ダンス / 祈りをともに捧げる / ココナッツでお出迎え
ガーナ人はいつも正装? / コフィー・アナン 元国連事務総長は金曜日生まれです。 / さあ、なんて答えようか。

41 どこ泊まる?

51 なに食べる?

61 ガーナへ行くための5つの準備

黄熱予防接種を受ける / 本を読む / ビザを取得する / お金・通信を用意する / 荷物を用意する

その他、目次未掲載の記事多数!



執筆者

横山 歩隆 (物理学類) 福島 ひなた (社会学類) 柳澤 栞生 (地球規模課題学位プログラム)
青木 喜大 (生物学類) 櫻井 陶哉 (工学システム学類) 前坪 優来 (社会学類)
澤原 菜々子 (構造エネルギー工学学位プログラム) 中澤 眞生 (ヒューマン・ケア科学専攻)
市川 政雄 (医学医療系) 福重 瑞穂 (医学医療系) 秋山 肇 (人文社会学系)



Accra

Cape Coast



私はこの旅で、本学のガーナ人の学生とルームシェアをしました。ガーナ人の友達ができるのは初めてでしたが、彼女は明るくて、優しく、ダンスが上手で、一緒にいると私までガーナ人になったような気がしています。このガイドブックのタイトルである“Agoo! Ghana!”は、そんな彼女が提案してくれたものです。現地語（チュイ語）で“こんにちは! ガーナ!”という意味で、“Agoo!”と言われたら、“Ameel!”と返答します。きっと現地で何度も使うことになるでしょう。この本を手にとってくださった皆さんも、ぜひ“Agoo!”と声に出してみてください。その一言が、ガーナへの扉を開く合図になるはずです。

(中澤眞生)

アクラからケープコーストまでは、デコボコな道が続く。
車酔いをする方は要注意。所要時間は渋滞がなければ約3時間。
私たちは行きも帰りも約5時間かかった。

(中澤真生)



- 訪問先
- ・ケープコースト大学
 - ・エルミナ城
 - ・カクム国立公園

道は険しい。
トイレがあまりない…?

現場で社会課題を考える。



海洋汚染は目に見えない

ガーナの中央州沿岸に位置するケープコースト市にある、ガーナ屈指の研究大学・ケープコースト大学（University of Cape Coast: UCC）を訪問しました。1962年に設立され、1971年に独立した大学として正式に認定された大学で、Times Higher Education世界大学ランキングでガーナ1位・西アフリカ1位・アフリカ4位に位置づけられており、ガーナ社会を牽引する人材を数多く輩出してきました。また、元々ガーナの教員育成を目的として設立された教育機関で、筑波大学と似た成り立ちがあります。整備された大きな通りと並木道がある様子もどことなく筑波大学に似ています。

今回は Africa Centre of Excellence in Coastal Resilience (ACECoR) というケープコースト大学にある、世界銀行からアフリカにおける沿岸レジリエンスの卓越センターとして認定された教育機関で海洋汚染に関する講義を受け、研究室・現場見学をさせていただきました。

海洋汚染と聞いてどんなイメージがあるでしょうか？多くの方はごみが海岸に積みあがっているような風景を思い浮かべるとと思います。



実はガーナの海洋汚染はプラスチックゴミに加えて、漁業と金採掘が盛んなことが深く関係しています。漁業はガーナのGDPの約5%を占め、漁獲・加工・流通を含めておよそ200万人の雇用を支える重要産業です。しかし漁師が沖から戻ると、魚よりもプラスチックごみのほうが多く網に入っていることもあるといわれています。

さらに厄介なのは、マイクロプラスチックによる目に見えない汚染が進行していることです。大きなプラスチックが紫外線や波にさらされ少しずつ砕け、微細な粒子となって海中に漂い続けます。魚はエラや消化管からマイクロプラスチックを取り込み体内に蓄積していきます。ガーナでは魚が動物性タンパク質の50～80%を占めるだけに、これは人の健康にも直結する問題です。



そして内陸では「ガラムセイ」と呼ばれる違法な小規模金採掘が広がっており、これが海へとつながる深刻な汚染源となっています。ガラムセイとは「集めて売る（gather and sell）」という英語表現に由来する言葉で、ガーナ各地の河川流域で行われている違法採掘活動のことです。採掘者は砂金を効率よく取り出すため水銀を使用しており、その廃液が処理されないまま川へ流れ込みます。汚染された川はやがてギニア湾へと注ぎ込み、重金属汚染は海へと広がっていきます。

河川に流出する重金属は、魚の生存や繁殖に深刻な影響を与え、免疫機能の低下などを引き起こすとされています。そして、食物連鎖を通じて人体にも蓄積され、重篤な先天性障害を持って生まれる子どもがいるケースが報告されています。



印象に残ったお話が一つあります。海辺で暮らす漁業コミュニティの人々は、どこで漁をするか、季節の変わり目をどう読むかといった判断を、長年受け継いできた土地の知識や言い伝えに基づいて行っているらしく、彼らは科学的な知見よりも経験と伝統を重んじる文化があるため、海洋汚染を防ぐよう指導しても、なかなか実践につながらないというのが現実であると聞きました。地域の文化や価値観に寄り添った教育が重要であることを実感しました。

また、違法採掘などの行為をただ禁止するだけでは、生計を失う人が出てしまうため、規制と支援をセットで考え、関わるすべての人が納得できる、持続可能な解決策を探ることが求められていると感じました。



美しい海を守りたいという思いと、日本で魚を食べられることへの感謝を改めて感じました。特に刺身をはじめとする魚食文化は日本でも身近なものですが、同じように魚を食べる文化を持ちながらも、海的环境や人々の暮らしには大きな差があることに驚かされました。食卓に並ぶ一皿の魚の背景に、海と人々の複雑な関係があることを忘れず、美しい海を次の世代へ引き継いでいくために何ができるかを考え続けていきたいです。

（櫻井陶哉）



「捨てる」が意味すること

今回のプログラムでは、講義や社会課題への取り組みの現場を視察するため、ガーナ大学を複数回訪問した。

ガーナ大学（University of Ghana）は、1948年に「University College of the Gold Coast」として設立されたガーナ最古の大学である。設立当初はロンドン大学の特別関係校として運営されていたが、ガーナ独立後の制度改革を経て、1961年に現在のガーナ大学となった。

大学はアクラ近郊のレゴンに位置し、人文学、社会科学、理学、医学など幅広い分野の学部を擁している。また、学内には複数の研究所が設置されており、代表的なものとして野口英世記念医学研究所、アフリカ研究所、人口・地域研究所、環境・衛生研究所がある。野口英世記念医学研究所は、1979年に日本政府の支援によって設立された。同研究所は、黄熱病の研究中にガーナで亡くなった野口英世博士にちなんで名付けられ、現在も感染症や公衆衛生に関する重要な研究拠点となっている。

（青木喜大）



ガーナ大学公衆衛生学部で教員2人の講義を受けた。テーマは電子廃棄物の問題。

1つ目の講義では、電子廃棄物が集積するアグボグブローシーで実際に調査を行っている教員から、環境汚染および人々の健康被害の実態について学んだ。

電子廃棄物には鉛、水銀、カドミウム、クロム、臭素系難燃剤などの有害物質が含まれている。特に、廃棄物の焼却作業やリサイクルに従事する労働者への健康被害が大きいという。また、調査自体の難しさについても語っていた。現地での調査には労働者との信頼関係の構築が不可欠である。研究者が一方向的に介入するだけでは、現地の人々の理解や協力を得ることは難しく、得られた知見も実際の改善や施策の実装には結びつかない。いかにして現地の人たちの信頼を得るかが、調査の成否を左右する重要な要素である。



印象的だったのは、Away is just another place という言葉。何かを「捨てる」という行為は、対象を消し去ることではなく、単に別の場所へ移すことにすぎない。その移された先では、環境汚染や健康被害を引き受ける人々が存在する。実際、ガーナには他国から中古品として電子機器が流入するが、その多くは使用できず、結果として大量の電子廃棄物が蓄積されている。また、Just throw it away といった何気ない言葉の裏には、先進国に暮らす私たちの認識の甘さがあると感じた。

私たちは何かを「捨てる」ことを、ゴミ箱に入れて終わりという行為として捉えがちである。しかし実際には、何かを誰かが生活する場へと送り出しているにすぎず、その結果として苦しむ人々がいる。その行き着く先に思いを巡らせる視点こそが、この問題の本質を理解し、解決へと導く鍵となるのではないだろうか。

2つ目の講義では、インフォーマルセクターについて学んだ。ガーナには有害・電子廃棄物を管理する法律がある。しかし、運用が伴っておらず、電子廃棄物の収集においてインフォーマルセクターが支えている。この講義でも、電子廃棄物の人びとへの影響について学んだが、統計上では把握されていない可能性もあると語られていた。電子廃棄物による健康被害は、可視化されている問題以上に深刻なのかもしれない。



講義の締めくくりでは、ガーナにおける廃棄物管理の現状について問題提起がなされた。法律や政策、研究の蓄積に加え、市民社会やインフォーマルセクターも役割を果たしているものの、電子廃棄物の回収・再利用・環境保全・健康保護を統合した仕組みの構築には、未だに多くの課題が残されているという点である。廃棄物問題を捉える際には、廃棄物を単に不要品として扱うのではなく、「誰にとってごみで、誰にとって資源なのか」、「その利益を受ける者とその負担を負う者は誰なのか」を考えることが重要だと指摘された。私たちにできることは非常に限られているだろう。しかし、この問題に向き合い続ける姿勢が大切だと感じた。

(福嶋ひなた)



電子ごみの山から世界は変わる

はじめに

私は今回のプログラムで、初めてアグボグブロシーを訪れた。事前学習としてガーナ大学の教員による講義を受け、その後現地で事業を行うMAGO MOTORS JAPANの方々から話を伺った。

アグボグブロシーの問題は、単なる廃棄物処理の問題ではなく、都市への移動、雇用、貧困、健康、そして国際的な資源循環のあり方が重なり合った問題なのだと学んだ。アグボグブロシーとMAGO MOTORS JAPANについて紹介したい。

アグボグブロシーとは何か？

アグボグブロシー (Agbogbloshie) は、ガーナの首都アクラにある、電子廃棄物の集積・解体・再利用の拠点として知られてきた場所である。そこでは不要になった電子機器を修理して再び使えるようにしたり、解体して金属や部材を回収したりすることで収入を得る人びとが長く働いてきた。



現地で聞いた話であるが、2021年にガーナ政府はアグボグブロシーのスクラップヤードを解体した。しかし、その後も非公式な電子廃棄物処理の活動は消えたわけではなく、アクラ市内や周辺へ分散しながら継続していると報告されている。何度も軍や警察を用いた摘発を行なっているが、それでも解決していない。ひとつの場所を壊せば問題が終わるわけではなく、むしろ問題が見えにくい形で再編されたとも言える。

なぜ人々はそこで働くのか？

ゴミを解体し金属を取り出すことでお金になるからである。とある調査では、ここで働く住民の約4分の3がGreater Accra以外の出身者とされている。お金を稼ぐために、農村部の貧困層が親戚などを頼って訪れる。

電子廃棄物はどこから来るのか？

どこからゴミが来るのかという問題は、「先進国が途上国に電子ごみを押しつける構図」として語られることがある。再使用・修理目的として輸入された機器のなかに、実際には機能しないものや短期間で廃棄物化するものが含まれてきたことは問題視されてきた。「善意の中古輸出」と「廃棄物の越境移動」の境界は、規制の弱い現場では曖昧になりやすく、取り扱いも難しいというのが現状である。同時に、アグボグブロシーではガーナ国内で発生した電子廃棄物も大量に処理されている。

この問題にどう向き合うか？

アグボグブロシーを環境汚染と健康被害がある「汚染された場所」と見るのは不適切である。仕事があり、生活があり、人びとが住む現実がある。解決には、廃棄物処理の技術的改善にとどまらず、教育・雇用・社会的支援の整備と、製造者責任を含む国際的な中古品の規制強化など、問題は山積みである。

こうした複合的な問題に対して、現地で実際に向き合い、事業を通じて解決策を模索している人びとがいる。

MAGO MOTORS JAPANについて

MAGO MOTORS JAPAN株式会社は、美術家の長坂真護氏が2022年にアグボグブロシーの問題に取り組むために設立した会社である。

長坂氏がこの地を初めて訪れたのは2017年。経済誌でゴミ山の前に立つ子どもの写真を目にしたことがきっかけで現地を訪れ、有毒ガスが立ち込めるなかで廃棄物を燃やし、日当わずか500円で生きる若者たちの姿に衝撃を受けた。大量のガスを吸い、癌などの病に蝕まれ、30代でこの世を去る人も多いという現実を前に、廃棄物を素材にしたアート作品を制作し、その売上がガーナへ還元することを決意する。

長坂氏の取り組みは、アートにとどまらなかった。売上から得た資金でガスマスクを現地に届け、2018年にはスラム街初の学校「MAGO ART AND STUDY」を設立。2019年には電子廃棄物美術館「MAGO E-Waste Museum」を開館した。そして2021年の強制解体を機に、より抜本的な問題解決へと舵を切り、MAGO MOTORS JAPANの設立へとつながっていく。



私たちは、MAGO MOTORS JAPANの事務所を訪れ、事業に関する説明を伺ったのち、事務所に隣接する工場を見学した。

MAGO MOTORS JAPANの事業の柱は三つある。リサイクル事業では、廃プラスチックや炭化素材を活用した建材「MAGO BLOCK」を日本企業と協力して製品化・販売している。農業事業では、アクラ近郊でモリンガやコーヒーを栽培し、土壌の回復と雇用創出を同時に狙っている。EV事業では、電動バイクや電動バスの普及を目指しており、地域の移動インフラと経済活動を支えようとしている。電動バスは、簡単に充電できるように充電方法を工夫したそうだ。また、住民の結束を育む場としてサッカーチームも設立している。サッカーチームを運営することで、これまで知らなかったガーナの風土を知ることもあると伺った。

同社の特徴は、支援や寄付に頼らず、事業として自立した仕組みを現地に根付かせることを目指している点にある。部族間の関係など現地特有の複雑な問題にも直面しながら、外からの一時的な介入ではなく、現地の人びとが当事者として回せる経済の循環をつくろうとしている。



訪問時、現地で働く日本人スタッフから「日本では自分の判断で世界を変えることは難しい。でもここガーナなら、自分たちが世界を変えられる」という言葉を聞いた。その言葉が強く印象に残っている。まだ小さな規模ではあるが、問題を「事業で解く」というパッションと姿勢に、強く感銘を受けた。

アグボグプロシーを訪れるとき、「汚染された場所を見に行く」という気持ちだけで行くと、見えるものが半分になる。そこには問題があり、同時にその問題にすでに向き合っている人たちがいる。ぜひ自分の目でその両方を確かめてほしい。

(青木喜大)



行商で子どもを救う

KOKO Plusとは、味の素ファンデーション（現地法人はKOKO Plusファンデーション）がガーナで展開している、離乳食に混ぜて摂取できる栄養サプリメントです。ガーナでは、2～3歳児の約30%が発育阻害の問題を抱えていると言われています。そこで、現地で伝統的に食べられている発酵コーンのお粥「KOKO」に混ぜることで栄養を補えるよう開発されたのが、このKOKO Plusです。



KOKO Plusファンデーションの事務所に到着して、まず出迎えてくれたのは、真っ黄色のポロシャツを着た本多さんと前山さん！お二人は日本の味の素株式会社から派遣されており、久しぶりに日本語で会話ができただことに、思わずほっとしてしまいました。KOKO Plusのパッケージやロゴ、車には「黄色」が使われており、職員全員このポロシャツを着ているそうです。

事務所では本多さんよりKOKO Plusの取り組みや課題について説明を受けました。そして、KOKOにKOKO Plusを混ぜたものを試食させてもらうことに。KOKO自体は少し酸味があるそうで、KOKO Plusを混ぜることで、その酸味が和らぐそうです。KOKO Plusは日本でいうきな粉のような味でしたが、KOKOのインパクトが想像以上に強く、完食できませんでした（ごめんなさい）。

現在の課題として挙げられていたのは、「教育」と「生産」の2つの側面です。たとえば、KOKO Plusについて知識を持っているナースに限られていること、保健所に足を運ぶお母さんの数に限りがあること。また、原材料価格の高騰など、現場ならではの課題が多くあることが分かりました。

講義のあとは、これらの課題をどのように解決できるかを考えるため、フィールドワークへ出発。まずは、KOKO Plusが実際に提供されている保健所を訪れました。子どもの健診の際に、ナースとお母さんが話す時間を設けて、KOKO Plusの紹介や試食を行なっているそうです。この取り組みは他の地域の保健所でも実施されているとのことでした。さらに印象的だったのは、KOKO Plusを使った料理教室です。地域のお母さんたちとナースと一緒に料理をすることで、自然とコミュニケーションが

生まれ、楽しみながらKOKO Plusについて知ることができる場になるそうです。

保健所のあとは、ローカルマーケットへ。人がとても多く、他の場所と比べて安全面にはより注意が必要とのことで、貴重品の管理についてもしっかり教えていただきました。マーケット内では、KOKO Plusが実際に販売されている様子も見学。職員の方々がこうした場所に足を運び、直接営業を行っていることを知り、地道な努力の積み重ねを感じました。

マーケットでお昼ご飯を調達し、オフィスに戻ってランチ。午後は、午前のレクチャーとフィールドワークを踏まえ、グループごとに課題解決のアイデアを考えました。なかにはユニークで思わず笑ってしまうような案もありました。最後に本多さんと前山さんからフィードバックをいただき、とても有意義なディスカッションとなりました。

そして夜ご飯は、本多さんのおすすめでエチオピア料理店へ。ガーナに来てまだガーナ料理も食べ尽くせていないのに、まさかのエチオピア料理！？と驚きましたが、これがとても美味しくで大満足でした。食事をしながら、本多さんや前山さんに人生相談をしたり、ガーナのおすすめ料理を教えてもらったりと、笑いの絶えない楽しい時間になりました。

本多さん、前山さん、そしてKOKO Plusファンデーションの皆さま、本当にありがとうございました。これから先、どこかで真っ黄色のポロシャツを見かけたら、きっとこの日のことを思い出すでしょう。

(柳澤菜生)





現金はもういらない？

みなさん、Suica使っていますか？電車にピッと乗れて、コンビニでも使えて、気づけば財布より出番が多い人もいないのではないでしょうか。日本にはICOCAやPASMOなど、交通系ICカードが70種類ほどあるそうです（さすがに多すぎ）。そんな当たり前すぎて意識していなかった便利さが、今、遠く離れたガーナを変えようとしています。今回紹介するのは、その仕組みをガーナで実現しようとしているスタートアップ、TranSoniCa（トランソニカ）です。

ガーナでは、4000万人以上が金融サービスにアクセスしていると言われていますが、その決済のほとんどは現金です。例えば、乗り合いバスのトロトロ。乗車時は現金で支払うのですが、お釣りがなくてなかなか進まない、車掌とちょっとしたトラブルになる、後ろに人がどんどん詰まるといった状況が日常的に見られます。その影響もあってか、私たちも滞在中、何度も渋滞に巻き込まれました。そのほか、レストランやスーパーマーケットでも支払いに時間がかかります。実際に私たちも、水1本を買うだけで小銭がなく苦勞する場面がありました。



現金中心の社会には、見えにくい問題もあります。お釣りのミスや着服といった人的トラブルや衛生面のリスクです。そして何より、「データが残らないこと」が大きな課題です。取引履歴が残らないため、個人の信用情報が蓄積されず、結果としてローンを組むことが難しくなります。

こうした課題を解決するために立ち上がったのがTranSoniCaです。創業者のダニエル（Daniel Kwantwi）さんは日本留学中に交通系ICカードを体験し、タッチするだけで支払いが完結する仕組みに衝撃を受けました。そして、その体験をガーナでも実現するため、2021年に非接触型のスマートカードを開発しました。

ただし、日本の仕組みをそのまま導入することはできません。最大の理由はコストです。そこで彼らは、ガーナで普及しているモバイルマネーを活用し、代理店でチャージできる仕組みを構築しました。安価な端末で運用できるようにすることで、現地に適した形に落とし込んで



います。現在はガーナ大学のキャンパスで導入が進み、すでに約1万7000人が利用、取引回数は430万回以上に達しています。

一方で、課題も少なくありません。例えば、バスが遅延すると、決済システムであるTranSoniCaに対して不満が向けられてしまいます。サービス全体の印象が一体化して捉えられてしまうためです。また、既存のバス運行業者は利益重視の傾向があり、顧客中心のサービス提供が難しいという構造的な問題もあります。

こうした状況に対し、TranSoniCaはさらに踏み込んだ取り組みを進めています。現在、ガーナ大学と連携し、自社でキャンパスシャトルバスを運行する計画を進めています。将来的にはEVバスの導入や、運転手が車両を分割購入できる仕組みの構築も構想されています。

普段何気なく使っている技術が、別の国では社会課題の解決に直結していると思うとワクワクしますね。ぜひ、便利なツールとしてだけでなく、社会を変える仕組みとして注目してみてください。

(前坪優来)



現金はまだ必要でした。



日本とガーナが交差する

アクラにあるJICAガーナオフィスに入ると、私たちの耳に入ってきたのは日本語。先日伺ったKOKO Plus同様、感激です。そこではJICAの事業についてお聞きしました。日本人スタッフが説明してくださり、安堵していたところにまさかの質問。

「JICAについて知っていることを5つ挙げてください。」その場の空気が凍ります。私は隣に座っていた友人と目を見合わせました。正直に白状します。予習が足りませんでした。こんなことにはならないよう、みなさんには事前のリサーチをお勧めします。それでもなんとか、5つのキーワードを出すことに成功し、事業紹介が始まりました。



JICA職員は日本人20名、ガーナ人20名の計40名程度。意外に日本人も勤務していますね。JICAの協力量針は「持続的かつ安定的な経済成長の促進」。その実現のために、①インフラ開発②産業・農業開発③保健④人材育成の4つの事業に焦点を当てているそうです。ここではインフラ開発の事例を紹介します。



1番ホットな話題は去年完成した「テーマ交差点」の道路開発です。テーマ交差点は、首都のアクラからの交通と、各国の輸入品が集まるテーマ港からの交通が交わる5差路。そのおかげで長年、交通渋滞に悩まされてきたそうです。そこで日本政府がガーナ政府と共同して道路開発支援を行った結果、渋滞の解消に成功しました。

ポイントは、道路の構造。アンダーパスと呼ばれる道路とその上を通るフライオーバーと呼ばれる道路を整備し、立体交差点を完成させました。インフラ開発を含め、それぞれの4つの事業チームは2~5人体制。少ない人数で大規模な事業、本当に敬服します。

講義を終えて、建物を出る際にすれ違ったのは日本人。お互い気づき、会釈とともに「お疲れ様です」と言葉を交わします。日本人特有のこの感じが懐かしかったです。

最後にガーナへ行ってみたいと思っている学生の方へ、JICA職員の方から得た有益な情報をお伝えします。それは不確実性を楽しむことができる人はガーナ向きということです。私たちは現地でさまざまなハプニングに遭遇しました。それでも楽しいことはたくさんあったと自信を持って答えられます。未知との遭遇に心躍らせているそこのあなた、ぜひガーナへ！

(福嶋ひなた)

ガーナを
肌で感じ取る。



ガーナと野口英世

2024年、新千円札が発行されたのは記憶に新しいですね。自販機が新札に対応しておらず困ったことも多かったのではないのでしょうか。旧千円札に描かれていた野口英世は新千円札の北里柴三郎の弟子で、スーパーエリート医師兼研究者。1927年にガーナへ黄熱病の研究のため渡航しましたが、自らが黄熱病にかかり病死してしまいました。皆さん野口英世の顔を覚えていますか？下の写真をご覧ください。私がじっくり彼をみて思ったこと、それは…

アフリカ大陸と似ている!!!

そんなアフリカに縁がある？彼の業績を残した記念館と、彼の名がついた現在大きな役割を果たしている研究所を見学しました。



アクラ 野口英世記念館

野口英世博士が実際に研究を行っていた実験室を改装した記念館で、博士が使ったとされる顕微鏡のレプリカや母、シカからの手紙などが展示されています。館内の小部屋には、銅像や野口が巡った国々の地図、巻物、新聞、家族の写真などが展示されています。壁には野口の半生が絵で描かれています。

当たり前かもしれませんが、当時はガーナまで船で来たそうです。いったい何日かかったのでしょうか？ガーナまで飛行機（17時間）でさえ長いと感じたのに…そう考えると学生が気軽に飛行機に乗って海外へ行ける時代って幸せですね。

気になった展示物は奥様との手紙です。届くのも書くのも時間がかかりそうですね。1通1通よく内容を校正して送っているのかな。しかし、その分届いたときの嬉しさは今とは比べ物にならないのかなと想像が膨らみました。LINEを返すのが面倒、大変なんて贅沢な悩みだと感じました。私は既読スルーしがちです。

(櫻井陶哉)

アクラ 野口記念医学研究所

この研究所は、野口英世博士を称えて、日本政府がガーナ政府と国民に寄贈する形で建設されました。ガーナでは、マラリア、HIV/AIDSなどの感染症が主要疾病の7割以上を占めています。西アフリカ地域の感染症対策に中心的な役割を果たす機関として、国際的にも認知されています。

感染症・疫病の研究施設だけあって、標本の管理が非常に厳重で、その徹底ぶりに改めて身が引き締まる思いがしました。

それにしても、日本政府がガーナにこの研究所を丸ごと寄贈したというのは驚きです。両国の深い友好関係と、博士への敬意の大きさを感じました。

現代でも博士の意思が日本だけではなく、外国でも生きているのに感動しました。医師だけに。



ガーナ大学



キャンパス・ツアー

ガーナ大学に到着してまず感じたのは、そのスケールの大きさだ。面積は筑波大学の約4～5倍（11～12 km²）にも及び、大学がひとつの街を形成しているかのようだった。学内には学生寮、ナイトマーケット、銀行など、生活に必要な施設がほぼ揃っている。

後日、ガーナ大学に留学中の日本人学生から伺った話によると、宿舎から教室まで徒歩40分以上かかることもあるという。それに加えて強烈な暑さを考えると、なかなか過酷な環境である。日差しが非常に強いため、訪問の際は日傘・日焼け止め・タオルを携帯することをおすすめしたい。

日本語スピーチコンテスト

3月21日、ガーナ大学にて在ガーナ日本大使館とガーナ大学の共催による日本語スピーチコンテストが開催された。冒頭では、筑波大学の森尾貴広教授が「漫画から学ぶ、漫画で学ぶ、漫画を学ぶ」をテーマに講演を行い、現地の中高校生・大学生・一般参加者から大きな反響を得た。スピーチコンテストには、日本語を学ぶ大学生のほか、日本にルーツを持つ子どもも参加しており、いずれも非常に流暢で驚かされた。日本に関心を持つガーナ人は一定数存在しており、今後もより多くの人々と交流を深めていきたいと感じた。

（青木喜大）



クワメ・エンクルマ記念公園・霊廟



ガーナに到着して Accra Mall の次に訪れたのが、Kwame Nkrumah Memorial Park です。ここは、ガーナ初代大統領 Kwame Nkrumah とその家族が祀られている場所で、園内には本人が使っていた家具や、これまでの功績などが展示されています。が、正直に言うと、自分は Kwame Nkrumah についてほぼ何も知らない状態で行ったので、「これはすごそう」「でも何がどうすごいのか分からない」という、知識不足の観光になりました。なので、予習が大事です。とはいえ、ガーナの歴史を知るうえでかなり重要な人物なので、行く行かないに関係なく少し調べておくとかかなり理解しやすくなると思います。ちなみに有名な言葉として、

“I am not African because I was born in Africa, but because Africa was born in me.”

があります。このフレーズ、少しだけ変えて使うとガーナの人にちょっとウケる可能性があります。使いどころは責任を持ちません！

園内にはクジャクがいました。思ったより普通にいて、しかも扱いがだいぶ雑めで、ちょっとかわいそうでした。

見学後は、公園内でご飯を食べました。ガーナ人の TA の方に、現地っぽい食べ物や飲み物を頼んでもらい、みんなでシェアしました。その中で圧倒的に印象に残ったのが、sobolo（ソボロ）という飲み物です。一口飲んだ瞬間、「え、おなかか燃えている!？」と思うくらい、かなり刺激が強かったです。ガーナ2日目にして飲み物との相性に不安を覚えた瞬間でした。一方で、食べ物はどれもおいしかったです（笑）。特にティラピア（Tilapia）は普通に当たりでした。

（横山歩隆）



国立博物館



National Museum of Ghana は、Memorial Park から車で10分もかからないくらいの場所に位置していたと思います。ここでは、昔のガーナの生活様式や歴史に関する展示に加えて、自然をテーマにしたアート作品を見ることができます。「ガーナってこういう国なんだな」というのが少しずつ見えてくる場所でした。ただし、ここはかなり大事なことをひとつ。めっちゃ暑いです。クーラーがあまり効いておらず、外の方が涼しかったです。当たり前ですが、ガーナはととても暑いです！ 水分補給を忘れずに！

(横山歩隆)



エルミナ城



ガーナ滞在12日目。今回の滞在でもっとも関心を寄せていたエルミナ城を訪れる日がやってきました。午前中はまず、ケープコースト大学でアフリカの歴史について授業を受けました。奴隷貿易や、世界遺産に登録されているエルミナ城の歴史など、日本にいただけではなかなか触れることのない内容を学ぶことができました。そして授業の後、エルミナ城へ向けて出発！ケープコースト大学から車で20分ほどで到着して、車から出ると、強い日差しが！急いでサングラスを取り出し、暑さと戦いながら城の中へ向かいます。学生の入場料60セディ（約900円）を払い、ついに内部へ足を踏み入れました。



見学はツアーガイドの方の案内付きで行われ、解説を聞きながら城内を巡りました。まず衝撃を受けたのは、男性用・女性用ともに地下牢の暗さと狭さです。地下牢はいくつかあり、場所によっては100~150人もの人びとが収容されていたそうです。さらに、選ばれた黒人女性はヨーロッパから来た白人男性と性的関係を強いられることがあり、抵抗した場合は見せしめとして罰を受けていたといいます。彼女たちが白人男性の部屋に行くのに通った階段や、抵抗した女性に罰が与えられた場所など、当時の残酷な構造がそのまま残されていました。

また、白人男性であっても、無断で酒を飲んだり不祥事を起こした場合には罰として収容される牢獄がありました。そのすぐ隣には、命令に従わなかった黒人が入れられる牢獄があります。先に、白人用、そのあとに黒人用の牢獄にはいて、その差を比べました。白人用の牢獄には光が差し込み、空気も通る構造で、水や食事とも与えられていたそうです。一方で黒人用の牢獄は、わずかな光が入るだけで換気はほとんどなく、水や食事とも与えられませんでした。つまり、一度入れられれば生きて出ることにはできない場所だったのです。壁に描かれたドクロの印は、その「死」を意味していたとされています。

このような環境の中で数ヶ月を過ごした後、人々は”Door of No Return (帰らざる扉)”と呼ばれる二度と戻って来られないことを象徴する悲劇の扉を通過してから「New World」と呼ばれたアメリカやヨーロッパへ向かう奴隷船に乗せられました。この扉は非常に低く、幅も狭く、実際に目の前に立つと胸が締め付けられました。

見学の最後には城の上に入り、海と街全体を見渡せる場所に行きました。そこには、美しい海と砂浜、穏やかな街並みが広がっていました。しかしこの素敵な街で、肌の色が違うという理由で、人間として扱われず、残酷な行為が行われていたという事実に強い衝撃を受けました。

奴隷貿易はすでに終わっていますが、現代の世界にはまだ人種差別や性別格差が依然として存在しています。日本人、アジア人という枠組みではなく、一人の人間として、ぜひこの場所を訪れ、歴史の生々しい痕跡に触れてほしい。そして、過去を学びながら、これからの世界や平和について考えるきっかけにしてほしいと強く感じました。

(柳澤栞生)



カクム国立公園



カクム国立公園は、ケープコーストから北に30kmほど行ったところにある、広大な熱帯雨林の保護区です。1992年に国立公園に指定されました。地元のコミュニティが主導してエコツーリズムを推進した珍しい例で、森林破壊から自然を守りながら、観光を通じて地域を活性化させる役割を担っているそうです。公園内には、絶滅危惧種のマルミミゾウやダイアナモンキー、珍しいボンゴ（ウシ科の哺乳類）などが生息しています。そのほかにも300種以上の鳥類や600種以上の蝶がおり、自然好きの人におすすめのスポットです！大きな動物は見るができなかったのですが、日本ではみないような大きなトカゲやたくさんの蝶が見られました！

公園への入場料（学生料金）は10ガーナセディ（約150円）、ハイキング、キャノピーウォークはそれぞれ200ガーナセディ、100ガーナセディでした。

この公園には、カクム国立公園といえばこれ！と言われる有名な吊り橋「キャノピーウォーク」があります。キャノピーウォークとは、全長約350メートル、地上30~40mの高さの7本の吊り橋です。カナダ人のエンジニアとガーナ人のスタッフによって設計・建設さ

れたそうです。7本の吊り橋はそれぞれの高さが違うため、異なる高さから樹木を観察できるようになっています。詳しくは公園内のミュージアムに書いてあるため、キャノピーウォークに参加する際には、渡る前にミュージアムに行くのがおすすめです！

吊り橋はかなり揺れますが、左右を網で囲われているため安心感があります。かなり高く、下も丸見えなので、高所恐怖症の人は控えた方が良いでしょう。ウェブサイトの情報に持ち物は双眼鏡と書いてあったのですが、持っていてもみられるのは虫くらいで、動物を見るのはかなり厳しそうでした。（私は歩くのに必死であり周りを見る余裕がなかったので、もしかしたらみられたのかも？）陽気なガーナ人のガイドさんが付いてくださるので、植物や生き物のことなど、気になったことがあればぜひ聞いてみてください。

（澤原菜々子）



薄水色の空の下
同じ道を歩く
昨日にはなかった花

夜に咲いたのか
それとも
私がやっと見つけたのか

福重 瑞穂



グラスカッターが脱走！



ガーナ大にある野口記念医学研究所では実験に使うさまざまな動物を飼育しており、数種類の動物を見学しました。そのうちの1つのグラスカッター（ネズミの一種）は、アフリカでは高級食材として好まれているそうです。獣医の先生がケージの扉を開けてグラスカッターを見せてくださいました。私たちが脱走しないか不安になり聞いてみると、大丈夫とのこと。その数秒後、1匹のグラスカッターが脱走しました。大勢の研究所スタッフがグラスカッターを追いかけ、大騒ぎとなりました。

（澤原菜々子）



ダンス・ダンス・ダンス

昼食を取ろうとしていたところ、ケープコースト大学の先生からダンス授業への参加のお誘い。会場に到着すると、伝統的な楽器を持った方々が集まっていました。演奏が始まると次第に人が増え、大合奏とダンスへ。私たちも参加し、その場の空気に引き込まれていきました。最初は戸惑いもありましたが、すっかりハマってしまい、ホテルに帰ってみんなでアフリカダンス動画を撮りました。

(前坪優来)

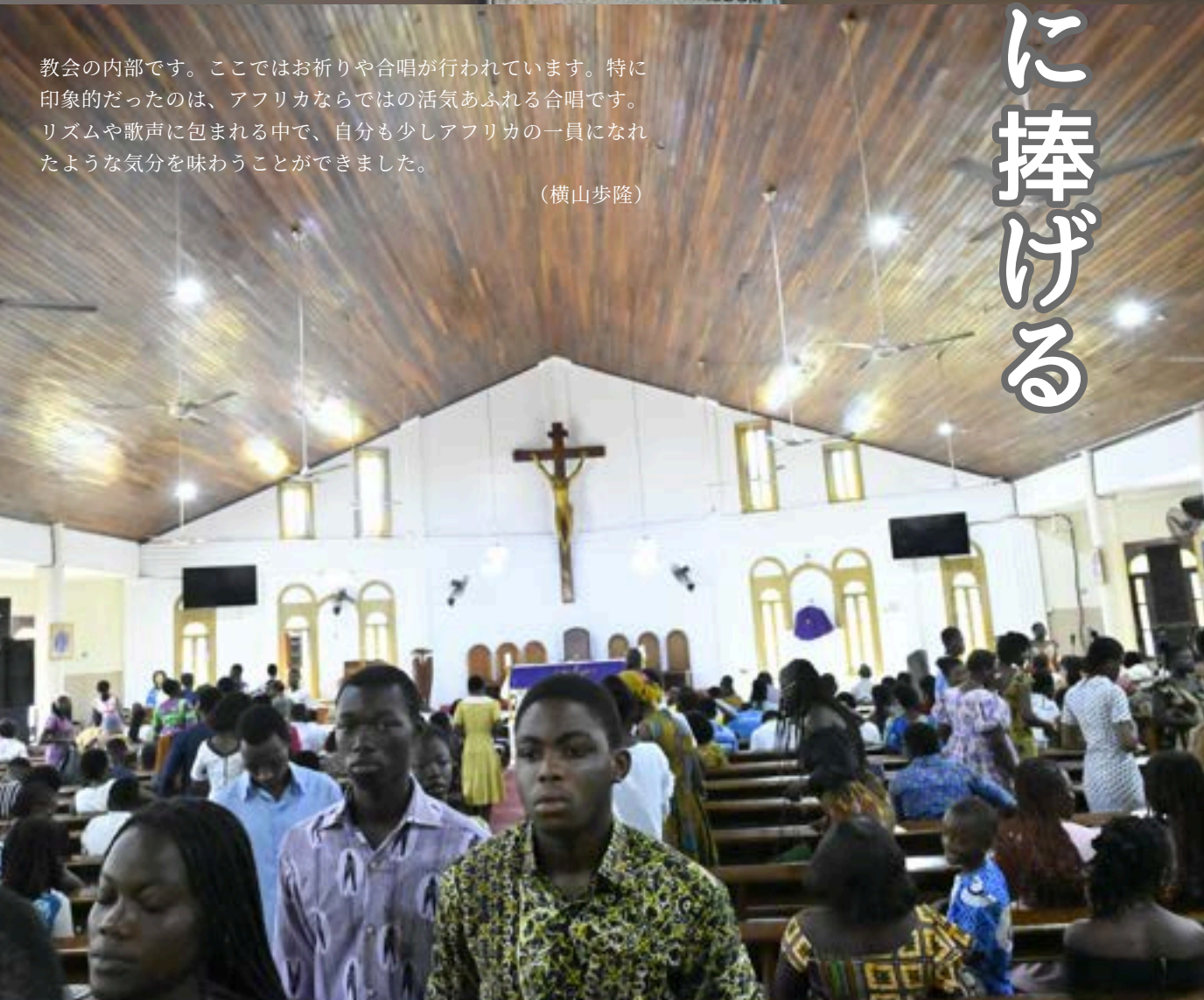


日曜日の朝、ケープコースト大学内にある教会を訪れました。
入口には両手を広げたイエス・キリストの像があり、まるで
私たちを歓迎してくれているようでした。

祈りをともに捧げる

教会の内部です。ここではお祈りや合唱が行われています。特に
印象的だったのは、アフリカならではの活気あふれる合唱です。
リズムや歌声に包まれる中で、自分も少しアフリカの一員になれ
たような気分を味わうことができました。

(横山歩隆)




ココナッツで お出迎え



長い長いドライブの末ケープコースト大学に着くと、大学の先生方が温かく迎えてくださいました。なかでも驚いたのがココナッツのプレゼントです。1人1つずつ、屈強なお兄さんがその場でココナッツの皮を剥いてストローをさして渡してくれました。あまりにも軽々ココナッツを扱っていたので、受け取ったとき、その重さに驚きました。ココナッツウォーターを飲んでた数分間で筋肉痛になりそうなくらいでした。ココナッツウォーターを飲み終わった後は、殻を割ってもらい中の実を食べました。ココナッツウォーターもココナッツも初めてだった私は、生臭い味が苦手で食べ切ることができなかったのですが、ガーナではとてもポピュラーな果物でよく食べるそうです。また、味にはかなり個体差があるようでした。時々ケープコースト大学内で売ってるところを見かけ、ガーナ人のTAの方はその場で買って飲んでいました。ナタデココとして美味しく食べられるように加工して販売されていることに感謝したくなりました。ケープコースト大学の先生方から温かい歓迎を受け、到着したばかりのケープコースト大学が好きになるような体験でした。

(澤原菜々子)



ガーナ人はいつも正装？

ガーナの人、いつも正装してない？——到着してすぐに感じたのがこれでした。特にショッピングモールや大学構内では、ワイシャツをボトムスに入れベルトを締めている人をよく見かけました。そこにジャケットを羽織り、ハットまで合わせる人もいます。女性は華やかなワンピースのような伝統衣装を着ている人が多く、こちらもフォーマルな印象。暑い国＝ラフな服装というイメージが覆された瞬間でした。

とはいえ、実際に過ごしてみると、日中の服装は半袖のTシャツが基本で問題ありません。ただし、室内の冷房が強いことがあるので注意が必要です。特に宿泊施設では温度調整ができないこともあるため、薄手の長袖を一枚持っておくと安心です。

また、フィールドワークや急な雨の後には蚊に遭遇することも。そんなときも長袖が役立ちます。暑さ対策と防寒・防虫対策のバランスをうまく取るのがガーナで快適に過ごすコツです。ガーナ人の正装に刺激を受けつつ、自分なりのちょうどいい服装を探してみてください。

(前坪優来)



コフィー・アナン 元国連事務総長は 金曜日生まれです。

「あなたは何曜日に生まれましたか？」これは行く先々で耳にした質問です。ガーナでは生まれた曜日と性別で子どもの名前を付けることがよくあります。地域により異なりますが、例えば私のように月曜日生まれの女性は「Adwoa (アジョア)」と Ghanaian name を名乗ることができます！

Day	Male Name	Female Name
Dwowa (Monday)	Kodwo, Kojo, Joojo/Jojo	Adwoa/Adwowa, Ewuradwoa
Benada (Tuesday)	Kobina, Kobby	Abena, Araba, Ewurabena
Wukuda (Wednesday)	Kweku	Ekua, Kuukua, Ewurakua
Yawda (Thursday)	Yaw, Ekow, Kow	Aba, Baaba
Fida (Friday)	Kofi, Fifi	Efua, Effie, Ewurafua
Memenda (Saturday)	Kwame, Kwamena, Ato	Ama, Ewurama, Amba
Kwesida (Sunday)	Kwesi	Esi, Ewuresi/Ewuraesi

アクラでお世話になった運転手のイシュマルさんに、自分の生まれた曜日と性別を伝えると性格診断が始まります。私は綺麗好きのようです…その情報が正しいかどうかはさておき、車内は大盛り上がりでした。ガーナならではの文化を楽しむためにも、何曜日に生まれたか確認して行くことをおすすめします。Ghanaian name を覚えたら、自己紹介と一緒に伝えましょう！きっと素敵な反応が返ってくるはずですよ。



運転手のイシュマルさん。いろんな場所に連れて行ってくださいました。その道中に、メンバー全員の性格診断も…。本当にお世話になりました！

(福嶋ひなた)



さあ、なんて答えようか。

日本からガーナへ渡航するにはいくつかのルートがある。大まかに分けると、中東・アフリカ経由かヨーロッパ経由。ヨーロッパ経由だと、私が利用したことがあるルートでは英国・ロンドン経由とオランダ・アムステルダム経由がある。しかし、往路・復路によって異なるが、乗り継ぎ時間が長く、ラウンジが使えたとしても苦痛を伴う。トルコ・イスタンブール経由も利用したことがある。こちらは中東とヨーロッパのどちらに区分されるのかは微妙なところだが、いずれにせよ乗り継ぎ時間が長い。ただし、ターキッシュエアラインズを利用する場合、乗り継ぎ時間が6時間以上の旅行客には市内観光ツアーが無料で提供される。ツアーの名称は「TOURISTABUL」。ツーリストとイスタンブールを組み合わせたのであろう。おやじギャグのようで親しみを感じ、参加することにした。

私が参加したツアーは乗り継ぎ時間の都合上、約3時間のもっとも短いコース。観光名所をバスで通過するのが大半のツアーで、疲労困憊の身にはちょうど良い。隣りに座る見知らぬおばちゃんは観光ガイドの説明をよそに、夢の中へ。窓の外に目をやっていた私もウトウトしてきた。

市内を巡って、どれだけたっただろうか。釣り糸を垂らす多くの人が列をなす橋の上で、観光バスは停車した。私たち乗客はバスから降ろされ、観光スポットらしいマーケットで1時間の自由行動が許された。そして、降車の際、観光ガイドが言った。「1時間後に帰ってこなかったら、先に空港へ向かうので、あとは（配布された資料の）電話番号に電話してください」と。

私は一人だったので、時間を気にしつつも、気ままにマーケットやその周辺を行ったり来たりした。あとで絶対見返すことがないのにエキゾチックな街並みをスマホに収めながら、何かめばしいものがないかとさまよった。が、余計なものは買うまいと所定の時間の15分前にはバスへ戻ってきてしまった。少し早かったかなと思ったら、私の隣りに座っていたおばちゃんはすでにバスに戻っていて、熟眠中。おばちゃんを起こさぬようそっと腰を下ろして、しばし釣り人を眺めた。すると、続々と客がバスに乗り込んできた。そして、観光ガイドが点呼をはじめた。

あとは空港へ戻るだけのはずだが、観光ガイドが首をかしげている。どうやら全員帰ってきていない模様。観光ガイドは点呼を繰り返したが、数が足りない。さあ、どうするのか……。もちろん、出発。えっ、出発するの、と思うのも東の間、無情にもバスは動きはじめた。これが日本であれば、力の限りを尽くして、不明の客を捜索するだろう。私は首を縦に振った。これでいいのだ。どんな事情があれ、他者を振り回すのはよくない。だって、帰国がかかっているのだから。

さて、日本からガーナへ渡航するのに乗り継ぎ時間が短いのは中東・アフリカ経由、航空会社はエミレーツ航空とエチオピア航空である。前者はアラブ首長国連邦・ドバイを経由、後者は韓国・インチョンとエチオピア・アジスアベバの2か国を経由する。どちらがよいかと言えば、当然エミレーツ航空。航空会社の格付けからしても断然エミレーツ航空に軍配が上がる。参

加学生には期待を持たせようと下心が働き、エミレーツ航空を利用すると伝えた。

ところが、である。エミレーツ航空では参加学生10名分の席が確保できないことがわかった。さて、困った。学生になんと言いついたらよいのだろうか。いやいや、正直に席が足りないと答えればいいじゃないか。ここでうしろめたさを感じるのは、くだんの下心のせいである。結局、アフリカ最大手の航空会社で、スターアライアンスに加盟しており、「ベスト・エアライン・イン・アフリカ」を何年も連続で受賞しているエチオピア航空を利用することになった。

エチオピア航空の空席状況を確認すると、後方の座席がかなり空いていた。成田発、エチオピア・アジスアベバ行きと、アジスアベバ発、ガーナ・アクラ行きの機材の座席はいずれも3-3-3（左側、中央、右側の3列、各列に座席が3つずつ）。座席の好みは窓側、通路側に分かれるだろうが、アフリカ行きの飛行機で体格が規格外の乗客と隣り合わせるリスクを考えると、通路側が安全である。とはいえ、私の経験からすると、通路側でも大変な目にあう可能性がある。今回は学生全員分の航空券を事務で一括予約することになっていたのだから、気を利かせて、ひとまず学生が一塊になるよう座席を予約した。搭乗当日、一部の学生は座席を変更していたが、だいたいまとまって座ることができた。そして、成田発、インチョン行きのエチオピア航空は定刻を過ぎて出発した。

成田からインチョンまでは約2時間半のフライト。その間に炭水化物たっぷりの機内食でおなかを膨らませた。そのまま眠りにつきたいところだが、トランジットのため、インチョンで降機。手荷物をもって、国際線乗り継ぎエリアへ向かった。セキュリティチェックはせわしない。時計を外し、ベルトを外し、パソコンをカバンから取り出して、セキュリティチェックのゲートへ向かう。すると、靴を脱ぐよう指示が飛んできた。仕方あるまい。生ぬるい革靴をセキュリティチェックのコンベアに載せた。これでセキュリティチェックは完了。搭乗口へ向かった。

搭乗口は思いのほか混雑しておらず、搭乗は首尾よく進んでいった。はて、インチョンからアジスアベバへ向かう人は少ないのか。搭乗して分かったが、そんなことはない。乗客でごった返している。しかも、あろうことかと、学生がインチョンまで座っていた座席の座面がはがされていた。え、さっきまで何の問題もなく座っていたのに故障中の張り紙が……。いったいどういうことか。座席がない学生は呆然と立ち尽くすしかない。さすがに飛行機に立席はないから、インチョンで足止めを食らうことになるのか。結局、予定



調和的に人数分の席は確保できた。しかし、せっかく一塊で座れるようにしていたのに、学生は散り散りバラバラに。誰もが好まない真ん中の席に甘んじることになった。

そんなトラブルがあつてから14時間を経て無事エチオピア・アジスアベバに到着した。ロング・フライトは体にこたえる。アジスアベバで少し骨休みしたいところである。しかし、乗換時間はほとんど残されていない。そそくさと飛行機を乗り換え、ガーナ・アクラへ向かった。所要時間は6時間。長いのやら短いのやら。

アクラの空港では以前お世話になった運転手のイシュマルさんが待っていてくれた。ポケットWIFIを起動させ、メールをチェック。すると、エチオピア航空からこんなメールが届いていた。

BE HONEST...

WHAT DO YOU REALLY THINK ABOUT US!?

さあ、なんて答えようか。

(市川政雄)



SKY SUITE APARTMENT(ACCRA)

ど
こ
泊
ま
る
？



SASAKAWA GUEST HOUSE(CAPE COAST)

SKY SUITE APARTMENT

リビング・キッチン



基本的に2人1部屋。

部屋には2つの個室とリビングがある。Wi-Fiはリビングでは高速で安定。

テレビはログインすればYouTube、Amazon Prime Video、Netflixが視聴可能。



キッチン用品は
一通り揃っており自炊可



設備

- ・テレビ ・ソファ ・机 ・クーラー（部屋によって調整不可の場合あり）
- ・キッチン（カトラリー、洗剤、スポンジ、キッチンペーパー、食器、鍋、ケトルなど）
- ・電子レンジ ・IHコンロ ・冷蔵庫（冷凍庫あり） ・ゴミ箱

その他：部屋の掃除は依頼すれば対応（フロントで事前に依頼＋立ち会いが必要）
水やジュースの購入は可能

ベッドルーム



Wi-Fiは場所によって弱くなる。(ベッド付近は不安定)



シャワーはお湯が出て、水圧も安定。
ボディソープは匂いが強い場合あり(とても甘い匂い)。

設備

- ・ベッド ・クローゼット ・クーラー ・アイロン、アイロン台
- ・バスタオル ・ハンガー (1~3本) ・トイレ (トイレットペーパーあり)
- ・シャワー (ボディソープのみ) ・洗面台 (ハンドソープあり)

周辺環境

- ・車で約5分の場所にAccra Mallがあり、換金や買い物が可能。
- ・モール内にスーパーマーケットが2店舗あり、品揃えは良い。
- ・全体的に価格が高め。



このスーパーには本当にお世話になった。

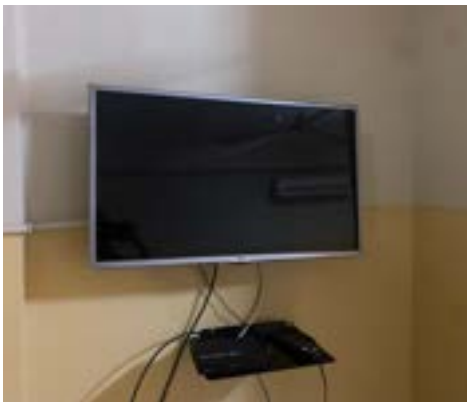


SASAKAWA GUEST HOUSE



設備

- ・机 ・椅子 ・ベッド ・テレビ ・冷蔵庫（冷凍スペースあり）
- ・クーラー（部屋によっては調整できず寒い） ・ファン
- ・クローゼット ・ハンガー（1～5本） ・シャワー（固形石鹸のみ）
- ・トイレ（トイレットペーパーあり）・洗面台・バスタオル
- ・WiFi（Sasakawa G. H. または eduroam）



◎通信環境

- ・Wi-Fiは不安定で、1日のうちに何度か使えないタイミングがある（特に停電後）
- ・電波も弱く、圏外になることが多々あった（ゲストハウスに限らずガーナ全体）
- ・ahamoを使用している人は比較的安定していた



廊下は暗め。



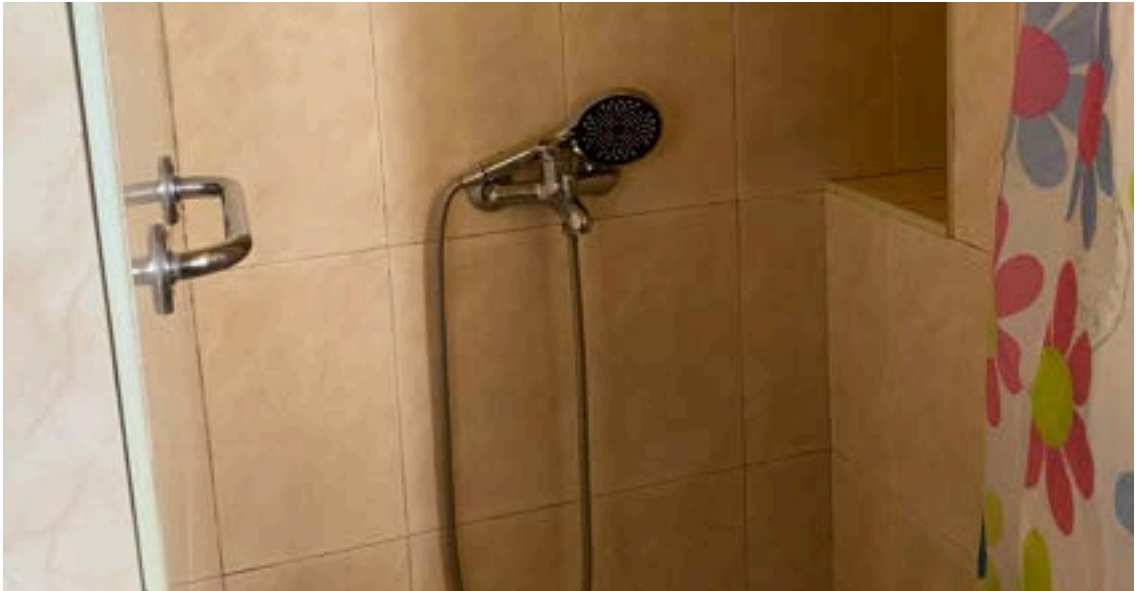
1階の部屋を使う人は、シャワー室の小窓にバスタオルをかけた方が良いでしょう。外から見えないように気をつけよう。



到着したら、窓が閉まるか確認しよう。窓が閉まらない場合はスタッフに言えば対応してもらえる。

水回りの環境

- ・シャワーはお湯が出るが、ちょうどよい温度にするのが難しい。
水しか出ない日もあった。
- ・水圧は弱め。夜遅くなると水圧がさらに弱くなり、お湯も出にくくなることがある。
- ・日中～夕方は水圧が安定し、あたたかいお湯が出ることが多い。



その他

- ・停電はほぼ毎日起こるので懐中電灯があると安心。
- ・ランドリーサービスが利用可能であるが、多くの人は手洗いをしていた。
- ・洗濯物は乾きにくいので、洗いやすい&乾きやすい素材の服を推奨。
- ・部屋にセーフティボックスはない。
- ・フロントで貴重品を預かってもらうことは可能。
- ・鍵がかかるスーツケースがあると、その中で保管できて安心。

周辺環境

基本的にゲストハウス近くのSasakawa restaurantで朝食・昼食・夕食をとることになる。
(学内には他にも2、3か所レストランはあるが、提供を断られる場合あり)



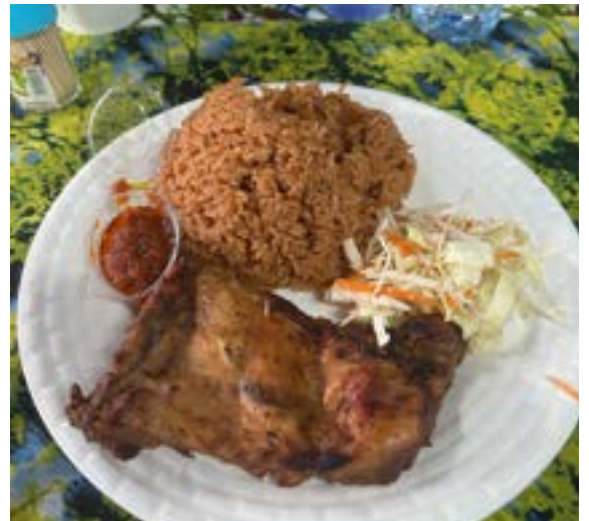
朝食



レストランの様子



フライドライス



ジョロフライス

- ・昼食と夕食のメニューは3択。①ジョロフライス、②フライドライス、③白米（＋フライドチキンまたは炭火焼きチキン）である。日や時間帯によってジョロフライスしかない。
- ・Sasakawa restaurantで水やビール、ジュースが購入可能（水750mlで5セディ）。お釣りがないこともあるため、細かい現金を用意しておくのがおすすめ。
- ・周辺にスーパーマーケットはなく、食料調達は難しい。
(車で10分ほどの場所にKFCとピザ屋あり)
- ・車で数分の場所に売店のような場所あり。
飲み物やお菓子は購入可能（水750mlで2.5セディ〜） ※惣菜やパンなどはない
アクラ滞在中に、インスタント食品やお菓子などを準備しておくことを強くおすすめする。

(前坪優来)

ガーナの日常



ゲストハウスの受付で朝食のクーポンを受け取り、ゲストハウスに併設された食堂に向かう。ゲストハウスから食堂まではわずかな距離。しかし、人と行き交えば、たとえ見知らぬ人であっても相手の目をみつめ、あいさつする。すると、朝日で照らされた相手の顔から自然と笑みがこぼれる。相手の快い返事に私の顔もほころぶ。日本ではまずありえない光景。ガーナではこれが日常である。

食堂に入ると、給仕のおばちゃんは私に目もくれず、スマホに映し出されたドラマに釘付けになっている。食堂の壁際に設置されたテレビからは別のドラマが大音量で放映されている。おばちゃんのスマホはテレビの音量を凌駕し、プラスチック・チェアに預けられたおばちゃんの体は完全に弛緩している。窓際のテーブルではやはり朝食中の客がスマホのドラマに夢中で、こちらもご多分に漏れず大音量。ガーナではこれが日常である。

とある日の夜、外がやけに騒がしいと思ったら、季節外れの豪雨がゲストハウスを襲っていた。ゲストハウスの屋根はトタンなので、雨音が響く。しかし、今回は様子が違う。あまりにも激しい風雨のせいか、雨音が連続的で雨音に聞こえない。しばらくすると、今度は違う雨音が聞こえてきた。天井に目をやると、雨漏りがはじまっていた。これはまずい。追加のバスタオルを求めゲストハウスの受付に赴くと、嘘かまことかバスタオルは全部出払っているとの非情な宣告。その後、雨脚は弱まり、事なきを得た。翌日、外に出ると大木があちらこちらで倒れていた。ガーナではこれが日常である・・・かどうかは短期滞在者にはわからない。

これがケープコースト大学構内のゲストハウスから垣間見たガーナ。やみつきになりそうだ。

(市川政雄)



なに食べる？

ガーナに行く前に気になることといえば、だいたい「虫」と「ごはん」だと思います。ガーナの食事、意外といけます。「思っていたより全然食べられる」「むしろ普通においしい」と感じるが多かったです。ただ、辛いが多かったので、苦手な方はお気をつけください。外食は高いので、ホテルで食べるが多かったです。「ガーナだから安そう」と思い込み、値段を見ないで頼むと後で後悔します。

フフ、バンクー

ガーナの伝統的な料理に、フフ（Fufu）とバンクー（Banku）があります。最初は少し身構えるかもしれませんが、せっかく行くならぜひ一度は食べてみてほしいです。辛いですがやみつきになる味です！



ジョロフライス

どの店にもあるジョロフライス。初めの頃はワクワクしながらよく注文しましたが、ケープコーストではほぼ毎日食べることになります。アクラでは、あえてジョロフライスを選ばなくても良いかもしれない。どのお店でも量が多めで、シェアすることもありました。絶対に出会える一品です。



ローカルな体験も。



地元の方が行くローカルなお店にも、連れて行ってもらいました。どれもボリュームで、スパイシーでした。現地の方は1日2食の時もあるらしい…！



パーティーでは贅沢な食事を。

ケープコースト大学では、米シンシナティ大学の学生と一緒にウエルカムパーティーに参加しました。



おなじみの味、ガーナでも。

二郎系ラーメン



ガーナには、日本人がオープンした二郎系ラーメン屋さんがあります！ アクラのホテルから徒歩圏内にありました。ラーメンはガーナでも人気があるようです。

サンドイッチ



サンドイッチもあります。ポテトは芋けんぴのようでした。

KFC



ケープコーストでもKFCやピザが食べられます。ただし、1時間以上待つことも…。

ピザ

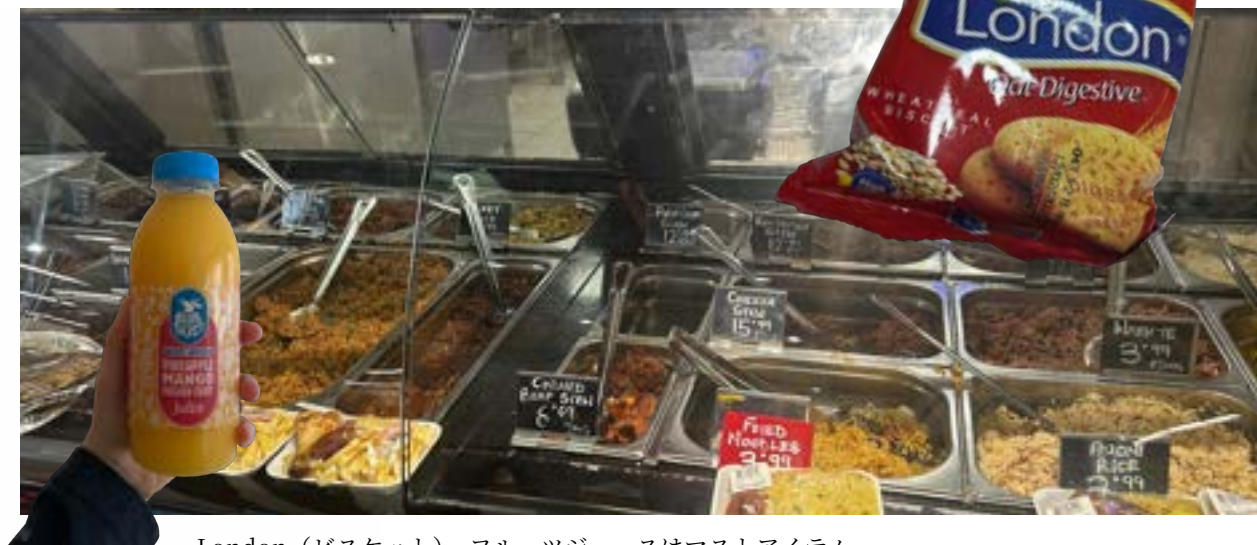


39



アクラ

ACCRA MALL



London (ビスケット)、フルーツジュースはマストアイテム。
アクラモールでは、よく惣菜を買いました。味はその日によって違う...かも？



キッチンが使えたので、自炊をしました。夏野菜を使ったパスタです！

日本から持ってきたものを食べることもありました。持参をおすすめします。

ケープコースト

SASAKAWA GUEST HOUSE

ケープコーストでは、主にSASAKAWA GUEST HOUSEの食堂で食事をとりました。昼食・夕食の選択肢は、Jollof Rice（ジョロフライス）か、Fried Rice（フライドライス）です。食堂の「ボス」の気分によってジョロフライスしかないときが多々あります。ジョロフライスはピリ辛なので辛いのが苦手な方はフライドライスを注文することをおすすめします（注文可能であれば）。



朝食



朝食はほぼ同じ、ジャムが欲しくなる。



昼食・夕食



持っていくと便利なもの

意外と役立つのが、軽食です。スケジュールによっては、「昼ごはんを食べる時間がない！」という日もあります。そんなときに、1本満足バーのようなものがあるとかなり助かります。地味ですが、かなり頼れます。口内炎がしやすい方は、チョコラBBやカムカムレモンなどを持ってくると快適にガーナを過ごせると思います！

（横山歩隆）

私たちが選んだベストなお土産

○

1. チョコレート



ガーナといえば…チョコレート！ガーナ行きを報告した家族や友人全員がそう答えました。実際、スーパーにはずらりと並んでいます。カカオのパーセンテージだけでなく、オレンジ、ナッツが入ったものなど、フレーバーも豊富です。中でもMAGO MOTORS JAPANの方が太鼓判を押すのは、アフリカ大陸が描かれた「fairafric」というブランドのチョコレート。種類によってパッケージに違いがあり、見た目も楽しいですね。空港でも売っていましたが高いので、スーパーで購入するのがおすすめです。



2. 洋服

次に「アフリカンファブリック」と呼ばれる布製品。ガーナ人は服にこだわりを持っている印象を受けます。大学のキャンパスは学生のおかげでカラフルに彩られていました。アクラモールの中にはアフリカ布を売るお店が。宝探しのように、お気に入りの柄を見つけるのも楽しみの1つではないでしょうか。似合うかわからないときは、店員さんに聞きましょう。似合っていなければ、渋い表情で首を振って全否定してくれます。日本のようなお世辞の文化はありません。ぜひ頼りにしてみてください。



3.シアバター



ハンドクリーム 85GHS

シアバターはガーナの特産品の1つ。シアの木の实から採れる天然の植物性油脂で、高い保湿力を持ちます。アクラ空港にあるお店では、石けんやハンドクリーム、ボディオイルなど様々な形で売られていました。とても優しい店員さんが、香りや商品を何度も試させてくれます。美容好きな方に最適なお土産です。

4.London



プレーン5.49GHS
チョコチップ6.29GHS

個人的なおすすめは、Londonというビスケット。名前からして手取るのをためらいますが、ちゃんとガーナのお菓子です。足繁く通ったアクラモール5日目にして出会ったこのお菓子は、朝ごはんやおやつとして数え切れないくらいお世話になりました。日本人にも受け入れられやすい素朴な味。チョコチップ入りに出会えることも。

5.ホットチョコレート



3.99GHS

紫のパッケージが目印のCadburyのホットチョコレート。日本円にして約60円とリーズナブルな価格ながら味は絶品。お湯に溶かすだけで簡単につくれるのも魅力です。チョコレートよりも軽く、キャリーケースの重量を気にせず買うことができるため、まとめ買いのお土産としても重宝します。

5.雑貨（マグネット・置物・マグカップ）



形に残るのが欲しい、そんな方にはマグカップや置物、マグネットなどの雑貨がおすすめ。マグカップには謎の単語が書かれているものがあります。それは Ghanaian name です。ガーナでは地域によりますが、生まれた曜日によって名前を決めることがあります。ガーナへ行く前に、生まれた曜日を確認しておきましょう。ガーナ人と心を通わせるきっかけになるはずです。



マグネット 60GHS



700GHS

番外編：太鼓

番外編として太鼓を紹介します。ダンスクラスで体験させてもらった思い入れの深い太鼓。一緒に行ったメンバーのなかにはお土産として買う学生も。日本の航空会社とは違い、荷物が雑に扱われる海外の航空会社。果たして無事に持って帰ることはできるのでしょうか。無傷で持って帰れたあかつきには、一生忘れられない買い物となりますね。

(福嶋ひなた)



どこにいるのでしょうか？



ガーナへ行くための 5つの準備

LOT	DESCRIPTION
1	...
2	...

MOVE IN NOW!

準備

1

黄熱予防接種を受ける。

ガーナ渡航が決まったら、すぐに黄熱予防接種の予約を取ることをお勧めする。黄熱は、ウイルスを持つ蚊に刺されると感染する病気で、アフリカ地域やアメリカ地域で流行している。ガーナもその流行国の1つ。黄熱予防接種は入国条件になっているので、証明書がないと、ビザを申請することさえできない。



マラロン

予想以上の大粒。飛行機移動中、内服のタイミングが難しかった。

私は大学で行われたガーナ渡航の説明会を終えた後、黄熱予防接種を扱っている東京都中央区のAクリニックへ電話した。何度かけてもお話中であったが、20回目にしてやっと予約を取ることができた。予約は最短でも2週間後であった。予約当日は午前中であれば、いつ行っても良いらしい。注射が苦手な私は、少しでも先延ばしにしたいと、ゆっくり家を出た。しかし残念ながら病院は混雑しており、1時間以上待つことになった。もしこれからAクリニックに行く方がいたら、早めの到着をお勧めしたい。(開院時間の5分前に着くと良い。)接種後は受付で黄熱予防接種証明書であるイエローカード(名前の通り、黄色の紙)をもらった。なお、この証明書は生涯有効である。

また、「マラリア予防薬」をもらうのも、忘れないようにしよう。マラリアは、マラリア原虫を持った蚊に刺されることで感染する病気であるが、薬を服用することで、予防できる。私が病院で処方された薬(マラロン)は渡航前日から毎日1錠ずつ内服する必要がある。

私には蚊との苦い思い出があるので、黄熱やマラリアといった蚊が媒介する病気になるのだけは避けたいと思っている。それは、カンボジアの北西部にある中学校で、とある調査していた時のこと。屋外にいることが多かったせいか、カンボジアで購入した虫除けスプレーを使っても、いつも蚊に刺されていた。手足は蚊に刺された跡でいっぱいであった。痒みを感じながら調査は終わり、日本に帰国した。そして翌日、みごとに発熱した。慌てて病院へ行き、すぐに隔離された。結局、蚊を媒介する感染症ではなかったが、もう二度とあんなことにはなりたくない。ガーナでは、蚊に注意して過ごしたいと思う。

準備

2

本を読む。

日本語で書かれたガーナのガイドブックはない。まずは「ガーナを知るための57章」を読んでガーナについて理解を深めよう。公益財団法人味の素ファンデーション/KOKO Plusファンデーションを訪れるのなら「地球行商人 味の素グリーンベレー」は必読書。



準備

3 ビザを取得する。

黄熱予防接種が終わったら、次はビザの申請をしよう。ビザはガーナ大使館のホームページから申請でき、受け取りは東京都港区にあるガーナ大使館で行う。受け取りができるのは、週に2日（火曜日・木曜日）のみ。申請には、宿泊証明書、大学の受け入れ証明書といった様々な書類が必要であったが、大学が入念な準備をしてくれた。今回、ビザは即日発行でお願いしたが、サーバーのトラブルで時間がかかることもあるらしい。ガーナ渡航が近づいていた私は、ビザの受け取りができるか不安であった。

ガーナ大使館に到着したのは10時過ぎ。恐る恐るインターホンを押すと、鍵が開いた。左へ進むと、受付にガーナ人らしき大柄な男性が座っており、ビザの窓口案内してくれた。私は10時から11時の枠で予約を取っていたが、すでに3人が待っていた。窓口では呼ばれた順番に書類を提出した。不備がある場合は、もう一度書類をアップロードする必要があるようで、待っている2人はパソコンで作業をしていた。そのうちの1人は、他校の大学生であった。ガーナ人の友達に会いに行くが、申請が思ったよりも大変だと嘆いていた。そんな様子を見ていたので、私の書類にも不備があるのではないかとひやひやした。そして私の順番がやってきた。私は、印刷してきた予約票と申請書、パスポート、ビザの料金を振り込んだ証明書を提出した。なお、私はネット銀行からビザの料金を振り込んだため、振込画面のスクリーンショットを印刷して持参した。しばらくして、もう一度呼ばれ、ビザを発給するので15時30分から17時30分に取りに来るようにと言われた。どうやら書類は揃っていたようだ。ホッとした。

それから私はランチを取ることにした。お目当ては、六本木にあるインド料理店の老舗「モティ」である。「カレー移民の謎」という本で知ってから、モティのバターチキンカレーの虜になった。私がこれまで食べてきたどのバターチキンカレーよりも、クリーミーで香ばしく、また食べたくなる味なのである。私は外国人コミュニティに行くことが多いので、エスニック料理には舌が肥えていると自負しているが、ここは格別。バターチキンカレーを楽しんだ後は、カフェで作業をし、ビザの発給を待った。時間通りに大使館へ行くと、すぐにパスポートを渡してくれた。これでガーナへの準備が整った。ガーナではどんな料理と出会えるだろうか。

準備

4

お金・通信を用意する。

クレジットカードはアクラモールくらいしか使えない。日本で米ドルを用意しよう。アクラモールでガーナセディに換金できる。できれば、細かい紙幣を持っていた方がケープコースト（Sasakawa guest house）では役立つが、換金所で細かい紙幣に換金してもらうのは難しい。アクラモールで現金を使って、お釣りをもらうしかない。

今回、通信環境はeSIMを用意した。eSIMよりも、ahamoの海外利用通信の方が速度が早かった気がする。

（中澤眞生）



荷物を用意する。

優先度 ★★★

- パスポート類
(海外保険証・コピーも印刷しておくで安心)
- イエローカード
- 変換プラグ
(G / BFタイプ)
- ドライヤー
(海外対応 or 変圧器と併用)
- モバイルバッテリー
- シャンプー・トリートメント
- 室内用サンダル
- 虫除けスプレー
(ディート30%、イカリジン15%配合のものがおすすめ)
- ティッシュ / ウェットティッシュ
- 薄手の上着
- 着替え (乾きやすいものがおすすめ)
- 歯ブラシ
- 常備薬
- 食べ物
(インスタント・お菓子など)
※カップ麺・味噌汁・パックご飯が大活躍!
ケープコーストでは、調理できないので、そのまま食べられるものを用意するか、カトラリー・携帯湯沸かし器などの準備をした方が良いでしょう。

優先度 ★★

- 学生証 (学割あり)
- ハンガー (数本)
- タオル
- 洗濯袋 / 洗濯洗剤
- ビニール袋
- 日焼け止め
- 帽子
- 経口補水液
(粉タイプがおすすめ)
- 水筒 / マグカップ
- スプーン・箸
- 携帯湯沸かし器
- 冷却グッズ
(現地で冷凍可能)

優先度 ★

- 延長コード
- ハンドソープ
- サングラス
- 耳栓 / アイマスク
- 酔い止め
(アクラ〜ケープコースト間
はかなり揺れる!)
- 懐中電灯
(停電対策にあると安心)
- 南京錠
- 小分け調味料
(醤油・塩コショウ・ジャム
など)



アクラ〜ケープコースト間には、トイレがあまりない。ガソリンスタンドのトイレを使わせてもらった。ローカルなトイレにはトイレットペーパーがないことも…。用意しておくで安心。

(前坪優来)





私たちは本当に 分かり合えるのだろうか

ガーナでの滞在も最終日（夜）となり、学生とともに踊った後に、ガーナでの16日間を振り返っている。私には、リーダーのI先生のような文才がない。さらにこれまでの整理もできていない。整理できないほどに、初めてのアフリカ、そしてガーナでの経験は、驚きに満ちたものであった。私の中にある言葉を、少しずつ紡いでみたいと思う。

まず、ガーナでの滞在では多くを学んだ。世界中の電子電気機器の廃棄物がガーナに集まり、その廃棄物の中で暮らしている人がいること、日本企業や日本の団体がガーナの社会課題解決のために様々な活動をしていること、日本に留学したガーナ人が社会問題解決のために貢献していること、ガーナにおけるゴミ処理が容易ではないこと、アフリカの歴史をアフリカの視点で語る必要があること、黒人奴隷がまさにモノのように取引されていたこと。これらを、実際に五感を使って学べたことは、私にとって大きな学びであった。

それでも私にとってさらに大きな学びは、他にあったような気がする。前の段落に書いたことは、五感を含めて学べたことであり、それなりに整理できている気がするし（整理できていないかもしれないが）、大きな学びではあった。ただ、整理できていない、うまく言語化できない学びに、学びの本質がある気がする。ガーナでの滞在を振り返る時、「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」という問いが頭をよぎる。これは、日本で育った者とガーナで育った者は分かり合えるのか、という問いである。ガーナでは皆さんに本当によくしてもらったし、こんなことを書くのは気が引けるが、正直、ガーナで大変だなと思うところが

たくさんあった。

まず、食事は私には難しかった。ジョロフライスというトマトベースの炊き込みご飯は、最初は美味しいと思いつつ食べていた。しかし、食事のオプションがあまり多くなく、繰り返し食べるにつれて、辛さと味を難しく感じるがあった。日本では異なるジャンルの食事が多くあるために、特に難しかったかもしれない。日本食が恋しくて、値の張るラーメンを食べに行ったこともあった。また、停電が複数回起き、不安になることもあった。停電が起きるような環境では、日本で昨今言われているAIの活用という発想ももしかすると出てきにくいかもしれない、とも感じた。ガーナでの経験は日本と色々と異なり、その結果、これだけ異なる環境にある中で、「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」との問いが頭をよぎったのだ。

もちろん、日本とガーナで似ていることも感じた。日本とガーナの学生は色々と議論していたし、議論の後には盛り上がっていることもあった。学生はこの国でも学生なのだ。ただし、多くの違うところがある。私が実際の感じたところ以外にも、調べて気付いたこともある。私はミュージカルが好きで、日本や外国で、ニューヨークやロンドンで初演されたミュージカルを観ることがある。しかしこうしたミュージカルは、ガーナでは上演されていない。首都のアクラでさえ、上演されていないのである。日本でミュージカルを観劇している人は多くないかもしれないが、少なくとも一定数は存在する。しかしガーナに生活する人たちは、ガーナにおいてこうした舞台芸術に触れる機会は、少なくともこれまでにはないのだ。

こうした経験や調べたことから、「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」と考えるようになった。例えば日本では様々な制度を重視する。しかしガーナでは人とのつながり重視して仕事をするかもしれない。そうすると、ここにはギャップが存在する。要は、あまりに違うように見えてしまうのである。

この問いに私が現時点で答えを出すことはできない。それは、もしかするとその答えが、私の価値観によればとても厳しいものかもしれない。答えを出すことに躊躇しているからかもしれない。それでもこの問いは重要である。「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」という問いは、「そもそも私たちが前提としているものは何なのか」という問いにつながるからである。

日本はいわゆる「先進国」と言われているだろうし、その中で、「先進国」の前提が日本の中にあるように思う。しかしその前提は本当に妥当なのか、を問う必要があるかもしれない。日本の前提を前提視しすぎているのかもしれない。日本の前提を前提視しているのか。これはなかなか厳しい問いである。もし私たちが分かり合えないのだとしたら、その理由の一端は、私たちの日本での普段の生活にあるのかもしれない。そうだとすれば私たちはどうすればいいのだろうか。

ガーナでの最終夜までの16日間は、私にとって日本での普段の生活の前提を問いかけるには十分な期間であった。明日飛行機に乗って日本に帰り、また日本での普段の生活に戻っていくだろう。ガーナでの経験は「思い出」として残っていくはずである。しかし「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」という問いは考え続けなければならないと思う。私がガーナで得た

自分への一番大きなお土産は、この問いであるような気がする。

リーダーのI先生には、寄稿は長くないように、と言われている。申し訳ないが、長くなってしまった気がする。それでも最後にもう少しだけ続けたい。私にはもう一つのお土産がある。それは、I先生や学生、他の教員と過ごした時間である。この時間は貴重なものであった。私にとっても、多くの学生にとっても慣れない環境であったため、それなりに大変なこともあった。そんな時に、ともにいることができた学生や教員との時間は貴重なものであった。特に、普段接点の少ない教員や学生と関わりつつ、この環境で帰国までたどり着いた。最低限のタフさはそれぞれに必要なだろうが、教員や学生とともに過ごすことで乗り越えられたことは多くある気がする。「私たちは本当に分かり合えるのだろうか」、「そもそも私たちが前提としているものは何なのか」という問いは、もしかすると一人で抱えるには難しい問いかもしれない。ガーナで共に過ごした教員や学生なら、こうした問いを共に考えてくれるかもしれない。

あと10時間ほどで、アクラから成田までの20時間を超える飛行機での移動が始まる。ガーナ滞在中には1時間に数回聞いていたI先生の素晴らしいジョークもしばらく聞けなくなるだろう。I先生なら私の問いにどのように答えてくださるだろうか。ぜひそれはあなたが、ガーナでI先生に聞いてみてほしい。ジョークも絡めて答えていただけるかもしれない。

(秋山 肇)



Special thanks to...

University of Cape Coast



University of Ghana





Medaase, Ghana!

"Thank you, Ghana!"

ガーナ航空はありません。



Agoo!
Ghana!

March 2026

大学の世界展開力強化事業～グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援～
筑波大学「地球社会共生の未来を共創する学際フィールド共修」